

「ゼノアーケオロジスト 紹介文」

岡和田晃

キレのよい名短篇「サブライム」(<http://prologuwave.com/archives/2351>)を「記憶だろうか？ その作者・山口優が、『エクリプス・フェイズ』のシェアードワールド小説企画に帰ってきた。その証左が、この「ゼノアーケオロジスト」である。

本作は単体でも十分に愉しむことができるが——さほど時間はかからないので——できれば「サブライム」と併せて読んでみてほしい。総合芸術家エステル・レンピカをめぐる運命の風景が、より重層的なものとして受け止められるはずだから。

“ゼノアーケオロジスト”とは、聞きなれない単語と思われるかもしれないが、これは『エクリプス・フェイズ』世界では「異星考古学者」のことを指す。奇しくも「Role & Roll」 Vol.104 (<http://prologuwave.com/archives/3408>)では、サンプル・キャラクターの「アルゴノーツの異星考古学者」が公開されているので、併せてご覧いただきたい。

ただ、今回の小説で活躍する「異星考古学者」は、サンプル・キャラクターの設定と

は異なる部分も多い。本稿で重要な役目を果たす異星考古学者、アシユル・レヴィナスは、SF作家たちが集まってプレイした『エクリップス・フェイス』のゲーム・セッションにおいて使用されたキャラクターだからである（キャラクター・デザインにあたっては、山口優が提示したコンセプトのもと、Analog Game Studies (<http://analoggamestudies.seesaa.net/>) が細部の数値設定等の協力を行なっている）。

本作は連作短篇として今後も続いていくようだが、「サブライム」と「ゼノアークオロジスト」が緩やかな繋がりを有しているように、アシユル＝山口優の冒険は、いっそう重層的なものとなってゆくことだろう。

山口優は『シンギュラリティ・コンクエスト 女神の誓約』で第11回日本SF新人賞を受賞した。続く『アルヴ・レズル ―機械仕掛けの妖精たち―』は第7回BOX-AIR新人賞、およびBOX-AIR新人賞年間最優秀賞に選出された。いずれも、『エクリップス・フェイス』に興味があれば、大満足違いなしの力作ポストヒューマンSFである。

とりわけ、『アルヴ・レズル』は、若年層の読者へ向けてポップな装いで出された本格SFで、神経細胞通信ナノマシン（ナーヴセラー・リンカー・ナノマシン）や、アーリー・ラブチャー（全世界で突如起きた、精神喪失事件）といった設定で人間の「魂」

と「肉体」の意味を鋭く問うている。

この『アルヴ・レズル』はマルチメディア展開を開始しており、通常版のほか、『アニメミライ2013』参加作品として劇場公開もされたアニメ版のDVDが同梱された限定版も販売されている。加えて、漫画家・天羽銀によるコミカライズ版の第1巻が、講談社シリウスKCより刊行された。これらも見逃せないだろう。余談だが、イラストレーターの小珠泰之介は、これらヴィジュアル作品を鑑賞したうえで、今回のイラストを仕上げてくれた。